

序にかえて―公益学図説へ公益学と私―

大島 美恵子

東北公益文科大学は、公益学を学問として研究し、教育する世界初の大学である。公益学は、学長小松隆二先生が提唱された新しいことばであり、公益学とは、人間がよりよく生きてゆくために、必ずしも利益利潤を生むとは限らない行動や思想について総合的に研究する学問として定義される。公益学を学問として体系化してゆくためには、既存の学問の方法論を用いて、公益活動をひとつひとつ解析し研究を進めていく必要がある。

このように学問としての公益学はまだ新しいが、よく考えてみると「公益」ということばには二十一世紀の新しい時代の要請がある。すなわち、二十世紀には、資本と市場原理を追求する思考が主流となり、効率がよくて強いものをよしとする風潮が生まれた。同様に、自然科学の分野でも、より便利で効率のよいものを重視し、自然でさえ克服するものとなり、自然環境との共存という考えは遙か後方にとり残された。他者の失敗のもとに自己の成功が成り立つという競争原理のなかでは、弱者と共存するという社会科学的思想もまたとり残されてきた。しかし、株値の上昇が止まりバブルがはじけた世紀末に至って、日本の社会には、経済基盤のみならず、社会の仕組み、政治、教育に至るまでのあらゆるところに歪みが露呈しはじめ、人々がいままでの価値観を大きく転換すべき時が来たことに気が付き始めたのであつ

た。これが、公益的発想である。公益学は、この公益的発想と公益的活動について研究し、二十世紀の反省のもとに、二十一世紀の新しい学問を打ち立てようとするものであり、まさに時代の要請ともいえる。

さて、公益学は、まだ生まれただけのため、定義さえも明確ではないが、これを私なりに理解し定義化して、既存の学問との関係のなかで位置づけたものを図示してみたい。公益学が、図によって少しはわかりやすく説明できれば幸いである。すなわち、私が考える公益学とは「自分の為だけではなくて、皆にとつての良い事」を社会のなかで進めてゆくにはどうしたらよいかを考える学問であり、文系理系の枠をこえて社会科学と人文科学と自然科学にまたがる領域を体系化するという今までにない壮大な学際的視野に立つ学問である。

(図1)は、公益学を、ただ生きていくだけでなく自分以外の世界を認識するのに重要なヒトの脳の前頭連合野(前頭葉)の働きに例えたものである。生後間もなくのヒトの脳では、呼吸するとかミルクを飲むといった「生きる」原点にたつ古い皮質が活動しているが、成長するにつれて新しい皮質が発達し、他人との関係を理解し、よりよく生きていくようになる。これをうまく統合していくのが前頭葉の発達である。まさに公益学は、「よりよく生きる」という目的のために、既存の学問をうまく統合してゆくヒトの脳の前頭葉と同じような働きをする学問である。

(図2)、(図3)、(図4)は、公益学が学問として活躍する領域をそれぞれの分野で示したものである。

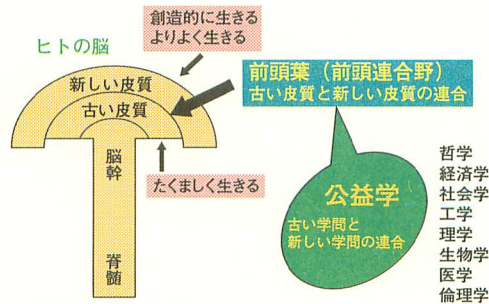


図1 ヒトの脳の前頭葉のはたらきと公益学

(図2)は、企業および金融機関の活動と公益との関連をまとめたものである。企業や金融機関の本来の活動は経済活動にあり、利潤をあげる事が重要な活動である。しかし、それと共に法的責任や倫理的責任を負っていることは、最近の金融機関や企業の破たんをみても明らかである。(図2)の台形の上のついているのが、公益学であり、企業や金融機関の法的責任や倫理的責任を解析してゆくことが公益学のこれからの主要な課題である。同様に(図3)は、福祉活動やボランティア活動と公益との関係をまとめたものである。福祉活動やボランティア活動は、今までは奉仕活動として括られ、参加者の自己満足に終わってきた面が大きかった。しかし、二十一世紀にはこれらの活動はさらに重要になると共に、その法的責任や経済的活動を視野に入れて円滑に運営していく必要が出てくる。この分野は学問的に解析されることの少なかった分野であり、ここに公益学の出番がある。

また、(図4)は、自然科学分野の活動と、公益との関係を図示したものである。図の左側の基礎物理学と生命科学は、より基礎的な学問の例としてあげたものであり、右側の工学と医療は、より応用科学としての要素が強い分野である。基礎的な学問領域でさえ、本来の研究活動だけではなく、科学の進歩によって生まれてくるさまざまな社会的問題を考えねばならぬ事柄が増えている。物理学の基礎研究が原子爆弾の開発に直結した事実をみても、研究者は自分の行っている基礎的研究が本当に「人のためになっているか」を考えながら研究すべきである。現代は、純粹な目的で研究に励んできたつもりの自然科学者がふと気がついたら、その研究が人間に深刻な影響を与える事がわかったというような事がひんぱんに起こる。世のために人のためという夢をもって自分が行っている基礎研究が、

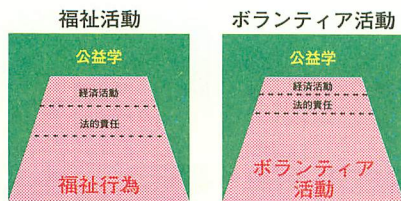


図3 福祉活動やボランティア活動と公益学との関係



図2 企業および金融機関の活動と公益

ある日突然応用されて全く逆の方向に使われるかも知れない時代に、自分の研究の社会的責任を考えずに研究してはいけないのではないかと私は思うのである。真理のための知の探求を目指してきた科学と、その応用としての人間の幸福のための技術の両方を信じてきた科学者自身が、科学技術の持つ正負の両面をよく考えるべき時代なのではないかと思う。これは科学者の責任でもあり、公益学の問題でもある。

一方、応用科学としての工学や医療は、基礎科学よりもっと多くの社会的問題を含んでいる。医療では、ともすれば医療機関の診療報酬の不正請求などが問題にされやすいが、医療には、関連するすべての人々が生活するための経済的活動が必須であるし、患者自身の生命と尊厳を守ることはさらに重要である。これらすべてが潤滑に活動するには、公益という視点が常に必要であり、これを解析する公益学が重要になる。ここに挙げた科学の分野のみではなく、自然科学のすべての分野において公益学が対象とすべき事柄は非常にたくさんある。

ここで、(図5)に学問の歴史について図示してみたい。ヨーロッパにおいて、まず学問として発達したのは神学である。そして、十二世紀ごろには、神学が統括する学問として、医学と法学が発達してきた。そして十九世紀になると、科学技術の加速度的な発展とともに学問は分化し、新しい分野が生まれてきた。科学(サイエンス)という言葉が生まれたのは十九世紀半ばのことであり、自然科学、社会科学、人文科学などのことが生まれた。二十世紀に入ると、科学技術と経済の急速な発展とともに、さらに学問は細分化していった。学問はそれぞれ先鋭化して進歩してゆき、お互いに理解しにくい学問として発

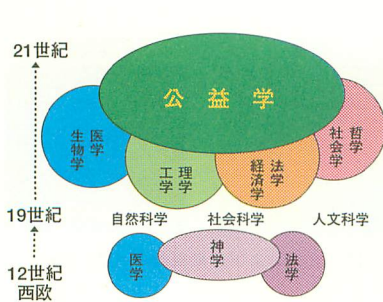


図5 学問の歴史

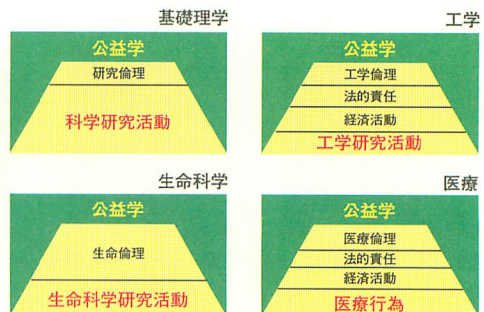


図4 自然科学的活動と公益 8

展してしまった。これが二十世紀の学問である。

しかし一部の学者たちの間には、余りに細分化された学問ではほんの一面しか見られないことに気付いた人たちもいた。たとえば、経済における倫理的側面を研究する経済学者と、倫理学を専攻する哲学者が一緒になって討議する気運もうまれてきた。企業倫理学、生命倫理学などの新しい学問がそれである。しかしながら現在、それらの学問は、それぞれの学問分野のなかに発展型として生まれたにすぎない。新しい学問「公益学」は、細分化した学問の発展型ではない。「自分の為だけではなくて、皆のために良い事を社会のなかで進めてゆくにはどうしたらよいかを考える」というのはつきりした目的をもつ学問として、細分化してしまった学問を、視点を変えてもう一度見直そうということである。(図6)は公益学という大きな家のなかに、いろいろな学問が包括され体系化されている図である。

まだ体系化されていない新しい学問を大学で学生に教えるのは無理ではなからうかという学外の方々の意見もあったが、その指摘は当然である。大学で学ぶのは、カルチャ―(教養)とリテラシー(基礎能力)であり、我が大学で最も重要視するのが、カルチャ―としての公益的思考なのである。大学では学生がこれらを身につけるように教育してゆくことになる。一方、学問としての公益学は、教員と学生が一体となって実践的に研究を進めていく予定である。まだ体系化されていない学問であるからこそ、学生と一緒に考えながら進んでゆけると思う。既存の学問をただ学ぶだけでは、二十一世紀の発展はない。

(図7)は、私が今まで行ってきた生命科学与公益学との関わりを図示したものである。



図6 公益学はいろいろな学問を包括している

二つの円が重なる領域が公益学で解析すべき分野である。私は、この分野に生命公益学という名称を提唱したい。この生命公益学の具体的な研究対象を次にまとめておきたい。

生命公益学の対象領域

- 一、衣食住など健康な生活にかかわる科学技術
食品添加物、衣服、建築材料、薬品、化粧品、洗剤など。
- 二、農業畜産などに関連する科学技術
遺伝子組換え植物、クローン羊、クローン牛その他。
- 三、生命の開始時をめぐる諸問題
不妊治療、人工受精、出生前診断、遺伝スクリーニング、ヒトゲノム解析など。
- 四、生命の終末時、死をめぐる諸問題
死の定義、ホスピス・緩和ケア、病名告知、尊厳死、脳死と臓器移植、安楽死など。
- 五、患者のクオリティ・オブ・ライフの諸問題
インフォームド・コンセント、薬剤治療、高齢者のケア、痴ほう者や障害を持つ人のケア、ゲノム解析による遺伝子治療、看護、介護、保育など。
- 六、地球環境問題
ごみ処理とリサイクル、地球温暖化問題、その他。
- 七、開発途上国への援助や国際協力の問題
生命科学技術、福祉、治療、教育など。

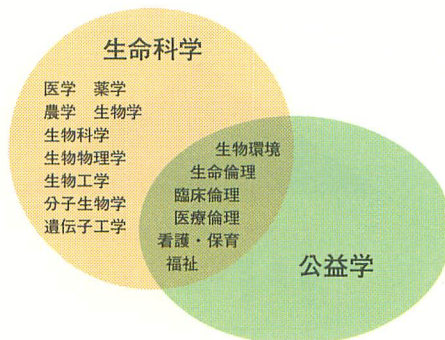


図7 生命科学と公益学のかかわり

さて、二十一世紀に本当に人のためになる科学技術がつくられるためには、最新の科学についての真実を科学者サイドから社会に対して語ることが必要である。科学を学べば学ぶほど、自然のなかで自分がいかに小さい存在であるか、科学的に説明できる事実がほんの僅かだという事を理解するようになるのだが、科学を知らない一般の人々は、科学によって何もかも説明できるかのように錯覚してしまう。遺伝子操作大豆で作られた食品についても、環境ホルモンにしても、遺伝子診断や臓器移植にまつわる生命倫理の問題でも、遺伝子治療など新しい医療の問題でも、何が可能で、どこに限界があるのかについて、科学者が一般の人にわかるようにやさしく説明することが必要である。公益的思想をもつ人が、科学技術を正確に理解することによって、「皆にとつての良い社会」をつくるための正しい判断ができるようになる。私が東北公益文科大学で進めていきたいのは、このような生命公益学である。